

2011・2012●図書館展示 12-1 月

金子みすゞ



企画●国立音楽大学附属図書館広報委員会

期間●2011年12月12日～2012年1月27日
場所●図書館ブラウジングルーム・AV資料室

金子みすゞ

2011年11月18日、《朗読の楽しみ 第2回》を開催しました。

参加者アンケートで「次に聴いてみたい作家」として人気の高かった、金子みすゞに関連する図書や楽譜を展示します。

また、AV資料室では、みすゞの詩を基にした歌唱や朗読の録音資料をご紹介します。

Contents

金子みすゞの生涯	2
作曲家から見たみすゞ	4
展示資料	5

企画 国立音楽大学附属図書館広報委員会

金子みすゞの生涯

誕生～学生時代

金子みすゞ(本名金子テル)は、1903(明治36)年4月11日、山口県大津郡仙崎村(現在の長門市仙崎)に、父金子庄之助、母ミチの長女として生まれた。父母と祖母ウメ、2歳上の兄堅助、2歳下の弟正祐との6人家族だった。庄之助は商い船の仕事をしていたが、ミチの妹フジの嫁ぎ先である下関の書店・上山文英堂の清国営口支店長となるべく大陸に渡り、1906(明治39)年、31歳の若さで亡くなった。上山文英堂の店主である上山松蔵とフジには子どもがいなかったため、弟正祐は上山家に養子にもらわれていった。稼ぎ頭のいなくなった金子家は、大津郡でただ1軒の本屋・金子文英堂を開店した。4人家族となった金子家だったが、いつも温かく明るい家庭だった。

テルの故郷仙崎は、豊かな漁場に恵まれた漁師町だった。仙崎一帯には、古くから仏教の信仰が深く根を下ろしていた。テルの時代にもお寺の日曜学校が盛んだった。

1910(明治43)年、テルは瀬戸崎尋常小学校(現在の仙崎小学校)に入学した。成績優秀で6年間全て甲だった。先生からの信頼も厚く、6年間級長を務めていた。テルは子どものころから本が好きだったが、友だちと元気に外で遊ぶことも大好きな少女だった。

1916(大正5)年、テルは大津郡立大津高等女学校に入学した。大津高女は、良妻賢母を育てる教育を第一としながらも、希望者に英語を教えたり、テニスなどのスポーツを取り入れるなど、新しい女性教育をめざす学校でもあった。女学生時代、テルには田辺豊々代という大親友がいた。豊々代は2年生に進級直後、健康上の理由で退学した。しかし、その後も手紙などで近況を知らせ合っていた。豊々代は1924(大正13)年に結婚したが、翌年22歳で亡くなった。

テルが女学校3年生の時、叔母上山フジが亡くなった。その後、夫のいない母ミチと妻を亡くした上山松蔵の間に結婚話がもちあがった。1919(大正8)年、ミチは松蔵と再婚し、上山文英堂での生活をスタートさせた。その時テルは16歳だった。この再婚で、正祐の生活に変化が起きた。下関商業の学生だった正祐は、長期休暇になると仙崎にやってくるようになった。

1920(大正9)年、テルは女学校を卒業した。テルの成績は、1年次と2年次は学年3番、3年次と4年次には学年2番だった。

テルが女学校を卒業したころから、正祐は頻りに仙崎を訪れるようになった。堅助、テル、正祐の親密度は増していった。しかし、3人の濃密な時間は長くは続かなかった。1922(大正11)年、堅助はテルの小学校時代の同級生である大島チウサと結婚した。堅助の結婚を機に、ミチはテルを下関の上山文英堂に呼び寄せた。

童謡詩人 金子みすゞ

1923(大正12)年4月、テルは仙崎から船に乗って下関へ到着した。当時の下関は、釜山との間に航路を持つ国際都市だった。下関駅を中心に、劇場や映画館などが次々に建設され、小東京と呼ばれていた。上山文英堂は、下関市西南部町にあった。店主である上山松蔵は兵庫県出身で、明治30年代の初めに書店の営業を開始した。大正12年頃には、本店の他に複数の支店を持ち、中国の大連、營口、旅順、青島にも支店を出すほどだった。

テルが下関にやってきた大正12年頃、日本の童謡は華やかな時代を迎えていた。1918(大正7)年7月に童話童謡雑誌『赤い鳥』が創刊され、翌1919年に『金の船』、1920年には『童話』が創刊された。『赤い鳥』では北原白秋が、『金の船』では野口雨情が、『童話』では西條八十が自作を発表し、また彼らは童謡投稿欄の選者として投稿詩人たちを育てようとしていた。

下関に移住したテルは、上山文英堂の支店で店番として働いていた。その頃、テルは日記を書くように、心に浮かんだ童謡を手帳に書き始めた。そして、『金子みすゞ』のペンネームで『童話』、『金の星』、『婦人倶楽部』、『婦人画報』の4つの雑誌に投稿した。『金の星』以外は、西條八十が選者だった。ちなみに、『みすゞ』というペンネームは、『信濃の国』にかかる枕詞「みすゞ刈る」が好きでつけたという。

1924(大正13)年には、「童話」にみすゞの童謡が毎号掲載されるようになった。通信欄にもみすゞの名前が目立ち、みすゞは投稿詩人たちの憧れの存在になっていった。しかし、みすゞの幸せは長くは続かなかった。みすゞの童謡を称賛してきた西條八十がフランスに留学することになったのである。「童話」の新たな選者になった吉江孤雁はみすゞの作風を好まなかった。八十を失ったみすゞは情熱を失い、「童話」への投稿は少なくなっていった。

1925(大正14)年に入ると、自選詩集『琅玕集』(ろうかんしゅう)を作り始めた。「琅玕」とは青または緑の半透明の宝石のことで、この詩集には、1924(大正13)年11月から翌年11月までに出版された20種類以上の雑誌や詩集から、多数の詩人の作品が書き写された。作者別にみていくと、北原白秋や西條八十の詩が多いが、無名の作者の詩や子どもの作品も少なくない。

みすゞが下関で暮らし始める少し前から、金子家と上山家の交流が多くなっていった。正祐にとって、従姉のみすゞはまぶしい存在だった。2人は本や映画、音楽など、様々な話をした。正祐はみすゞに恋心を抱いたこともあったと後に語っている。当時の正祐はみすゞが実の姉だとは知らなかった。

正祐は、自分は松蔵の実子ではないのではないかという不安を抱いていた。1925(大正14)年5月に届いた徴兵通知書によって、正祐は真実を知ることになる。その通知書には、「松蔵養父」と書かれていた。正祐は養子問題の悩みから、ますますみすゞと語る時間を求め、2人はさらに親密になっていった。

みすゞの縁談

1925年の終わりごろ、みすゞに縁談が持ち上がった。みすゞと正祐の親密さを心配した松蔵とミチが話を進めていたのだ。みすゞの結婚相手候補は、正祐が成長するまでのつなぎとして上山文英堂をまかせられそうな、番頭候補の男だった。正祐は、みすゞの結婚相手探しが行われているらしいことを察知し、自身の養子問題が発覚したこともあり、松蔵に反発した。正祐がみすゞの縁談を正式に聞いたのは、翌年になってからのことだった。正祐は、一時仙崎に戻っていたみすゞに結婚反対の「建白書」を送った。しかし、みすゞは正祐に賛成しなかった。みすゞがその縁談を受け入れたのは、ミチの上山家での立場などを思っていたのことだったのかもしれない。数度の手紙のやり取りの末、仙崎を訪ねた正祐は、改めてみすゞに結婚反対の意見を伝えた。そして、この時初めて、正祐はみすゞの実弟であることを知った。

1926(大正15)年2月17日、上山文英堂にてみすゞの結婚式が行われ、文英堂の2階での新婚生活が始まった。結婚直後から、商売上手の夫と芸術家肌の正祐が対立し、実生活は波乱に満ちていた。しかし、童謡詩人金子みすゞにとっては、記念すべき出来事が起きた。みすゞは、一流の詩人たちを会員として1925(大正14)年に発足した童謡詩人会の会員として認められることになった。童謡詩人会の発足時の会員のうち、女性は与謝野晶子1人だった。晶子は当時40代半ばで、明星派の歌人として知らないものはなかった。一方、みすゞは童謡を書き始めて、わずか3年あまりでの快挙だった。

娘の誕生

やがて正祐と夫の対立が深まり、さらに夫の女性問題が起きたこともあり、別れ話が持ち上がった。しかしこの時、みすゞには新しい命が宿っていたため、別れ話は取り消された。1926年11月14日、娘ふさえが誕生した。ふさえの誕生は、みすゞに希望を与えた。だが、その後夫はみすゞに童謡を書くことを禁じ、みすゞはこのころから体調を崩していった。ふさえが3歳になる少し前の1929(昭和4)年10月から、みすゞは「南京玉」と題した手帳に、ふさえのおしゃべりを書き綴るようになった。夫との関係や病気に悩むみすゞの姿も、ふさえの言葉から間接的に伝わってくる。

みすゞの死

1930(昭和5)年、みすゞは離婚を決意するほど追いつめられていった。みすゞは離婚後もふさえを育てることを望んだ。夫はその条件を受け入れていたが、離婚手続き後すぐ、ふさえを渡すよう要求した。3月10日に連れに行くという手紙だった。その日、3通の遺書を残し、みすゞは自ら命を絶った。享年26歳。遺書には、ふさえを大事に育てたいので、母ミチにあずけてほしいとあった。みすゞの自殺が、夫への抗議の意を込めたことなのか、その他の理由があったのか、定かではない。しかし、ふさえはみすゞの望み通り、ミチの養女として育てられることになった。みすゞは現在、仙崎の遍照寺に、父庄之助とともに眠っている。

矢崎節夫による調査

みすゞの死後、彼女とその作品はすっかり忘れ去られたかにみえた。しかし、与田準一編『日本童謡集』(岩波書店、1957)にみすゞの詩「大漁」が掲載されるなど、みすゞの詩を埋もれさせまいという流れが僅かに残っていた。

1966(昭和41)年、大学生だった矢崎節夫は『日本童謡集』を読み、みすゞの詩に出会った。「大漁」に衝撃を受けた矢崎は、みすゞに関する調査を始めた。調査開始から数年で、みすゞが下関に住んでいたという情報を詩人の佐藤義美から得ることができ、壇上春清が発行した金子みすゞ童謡集『繭と墓』によって30ほどの詩を読むことができた。しかし、その後の調査は進まぬまま時が流れた。

1982(昭和57)年、矢崎は下関の友人から、みすゞを知っている人が見つかったとの連絡を受けた。その人物は、みすゞの従弟の花井正だった。花井との電話で、矢崎はみすゞの弟が東京にいることを知った。みすゞの弟上山雅輔(本名上山正祐)と接触した矢崎は、雅輔から手書きの童謡集『美しい町』、『空のかあさま』、『さみしい王女』を渡された。512編の詩を読んだ矢崎は全集出版に向けて動き始めた。そして、1984(昭和59)年、『金子みすゞ全集』が出版された。その大部分が初めて世に出た作品だった。その後、みすゞの詩は多くの読者を獲得することとなった。

参考文献

- ・矢崎節夫監修『金子みすゞ』JULA出版局、2010(請求記号 J118-603)
- ・矢崎節夫著『童謡詩人金子みすゞの生涯』JULA出版局、1993(請求記号 J76-311)
- ・今野勉著『金子みすゞふたたび』小学館、2007(請求記号 J112-331)
- ・矢崎節夫著『金子みすゞノート(金子みすゞ全集別冊)』JULA出版局、1984(請求記号 J76-517)

作曲家から見たみすゞ

小林秀雄

「こよなく美しい言葉で語り始められるその詩の多くは、終末付近、または最後の行に、人の心の深奥を決定的に衝く比類ないメッセージが待っている。そこには巧まずして高く深い哲学性、宗教性が溢れ、人間と人間社会の深淵が掘り起こされ、読む人の心を掴んで離さず、愛と畏敬に満ちた自然観、人間観、人生観の世界に導いてくれる。単なる事物描写を主とした並の童謡とは異なり、大自然(神)がこの人の筆をつうじ、われわれに語りかける感に打たれるのは、私のみではないであろう」

(『金子みすゞの詩による水と影』(請求記号 F21-105)より)

横山裕美子

「金子みすゞの詩には、あたりまえと思われていたことを鋭い視点で捉え直し、生きとし生けるものたちの命の輝きと尊さをうたい上げたものが多い。一方でみすゞは、「喜び」の影には「悲しみ」が、「目に見えるもの」の影には「目に見えぬもの」が、私たちの「生」の影には無数の「死」が存在することをうたっている。どちらかひとつだけが存在することはない。また、どちらが上位とか下位とかいうこともない。それぞれに存在意義があり、役目を果たしているのである。人間はそのことに深く思いをめぐらせ、内抱して生きていかなければならない。みすゞの詩に付曲することは、まさにみすゞとの旅であり、みすゞの示した光と影を抱きしめに行く旅であった」
(『みすゞとの旅』(請求記号 F23-857)より)

信長貴富

「金子みすゞの詩風には、西條八十を始めとする同時代の童謡詩人の影響が見られると同時に、竹友藻風や西條八十の訳で当時日本に紹介されたクリスティナ・ロセッティやマザー・グースといった英国童謡詩からの直接的・間接的な影響も見受けられます。みすゞの詩からは、和装と洋装が交差した当時の日本人の美的感覚が薫ってくるようです。このことは、作曲上の音選びに反映しています」
(『混声三部合唱とピアノのための青いフォークロア』(請求記号 F25-942)より)

三善晃

「その人の詩句を借りれば「私ばかり」としんでいたいと思っていた金子みすゞの詩で、女声合唱のための曲を書いた。…しかし、誰しもが「私のみすゞ」を抱いているのだらうと、いま思う。だから、みすゞの詩には既に多くの曲が作られていると聞いても、それはそれでいい、みんな「私のみすゞ」を歌えばいいのだと思う。だが本当は、おそらく逆なのだろう。それぞれに「私のみすゞ」を抱いているみんなが、一人の金子みすゞのなかに掬い取られているのだ」
(『金子みすゞの詩による五つの詩曲』(請求記号 F23-504)より)

展示資料

<パネル>

金子みすゞ

Kaneko, Misuzu, 1903-1930

本名テル。

大正 12(1923)年 5 月 3 日、下関市黒川写真館にて撮影。

出典:金子みすゞ / 矢崎節夫監修。 - JULA 出版局, 2010.(請求記号 J118-603)

死の前日の写真

昭和 5(1930)年 3 月 9 日、下関市亀山八幡宮隣の三好写真館にて撮影。3 月 10 日、上山文英堂書店内で死去。享年満 26 歳。

出典:金子みすゞ全集 / 与田準一(ほか)編。 - JULA 出版局, 1984.(請求記号 J76-517)

みすゞと兄堅助

小学生の頃。

出典:金子みすゞ / 矢崎節夫監修。 - JULA 出版局, 2010.(請求記号 J118-603)

みすゞと弟正祐

仙崎の金子家の縁側で撮ったもの。

出典:金子みすゞ / 矢崎節夫監修。 - JULA 出版局, 2010.(請求記号 J118-603)

結婚記念写真

大正 15(1926)年 2月 17日、宮本啓喜と結婚。

出典:金子みすゞ全集 / 与田準一〔ほか〕編。 - JULA 出版局, 1984.(請求記号 J76-517)

金子みすゞ記念館

2003年 4月 11日、長門市仙崎に開館。金子文英堂が復元され、記念館の入口になっている。

出典:金子みすゞ / 矢崎節夫監修。 - JULA 出版局, 2010.(請求記号 J118-603)

遺稿手帳

西條八十に送った 3冊の童謡集の副本。弟の上山雅輔(正祐)に遺されていた。第一童謡集『美しい町』、第二童謡集『空のかあさま』、第三童謡集『さみしい王女』。

出典:金子みすゞ全集 / 与田準一〔ほか〕編。 - JULA 出版局, 1984.(請求記号 J76-516)

巻末手記

第三童謡集『さみしい王女』の巻末。

出典:金子みすゞ / 矢崎節夫監修。 - JULA 出版局, 2010.(請求記号 J118-603)

琅玕集(ろうかんしゅう)

大正 14(1925)年に作り始めた自選詩集。20 数種類の雑誌や詩集から、106 人、199 編の作品が書き写されている。

出典:金子みすゞ / 矢崎節夫監修。 - JULA 出版局, 2010.(請求記号 J118-603)

『童話』大正 12 年 9 月号(復刻版)

『お魚』と『打出の小槌』が掲載され、選者の西條八十に賞賛された。

出典:金子みすゞ / 矢崎節夫監修。 - JULA 出版局, 2010.(請求記号 J118-603)

< 図書 >

与田準一〔ほか〕編『金子みすゞ全集』

JULA 出版局, 1984 請求記号 J76-514/(1), J76-515/(2), J76-516/(3), J76-517/(supl)

弟の上山雅輔(正祐)によって保管されていた 3冊の自筆の手帳をもとに出版された。第一童謡集『美しい町』、第二童謡集『空のかあさま』、第三童謡集『さみしい王女』、別冊『金子みすゞノート』

金子みすゞ著『薔と墓 ; 金子みすゞ童謡集』

大空社, 1996(叢書日本の童謡) 請求記号 C61-381

金子みすゞと同時代の投稿詩人であった壇上春清がまとめたもの。季節の窓詩舎昭和 45 年刊の複製。

金子みすゞ著 ; 〔矢崎節夫〕〔選・鑑賞解説〕『金子みすゞ』

小学館, 2009 請求記号 J117-323

50 編の詩を現代仮名遣い、鑑賞解説付きで収録

金子みすゞ詩 ; 栗原弘写真『金子みすゞ心の風景』

美術年鑑社, 2010 請求記号 J119-253

34 編の詩と下関の風景写真を掲載

金子みすゞ作 ; 上野紀子絵『ほしとたんぼぼ』

JULA 出版局, 1985 請求記号 C58-877

15 編の詩を取り上げた童謡絵本

金子みすゞ〔詩〕 ; 吉岡しげ美著 ; はたよしこ絵

『金子みすゞをうたう ; みんなを好きになりたいな』

クレヨンハウス, 2003 請求記号 J98-411

24 編の詩を取り上げて思いを語り、曲をつけている

矢崎節夫著『童謡詩人金子みすゞの生涯』

JULA 出版局, 1993 請求記号 J76-311

遺稿を発見し再び世に送りだした著者が、遺族・関係者の話や資料をもとに記した生涯

矢崎節夫監修 『金子みすゞ ; 没後 80 年みんなちがって、みんないい。』
JULA 出版局, 2010 請求記号 J118-603
豊富な図版で生涯を綴り、多数の著名人からのコメントを掲載

今野勉著 『金子みすゞふたたび』
小学館, 2007 請求記号 J112-331
NHK スペシャル「こころの王国～童謡詩人金子みすゞの世界」を制作した著者が迎える金子みすゞの詩と生涯

詩と詩論研究会編 『金子みすゞみ仏への祈り』
勉誠出版, 2011 請求記号 J120-322
金子みすゞの心に関する考察

< 楽譜 >

池辺晋一郎 『いのちと、こころと... ; 金子みすゞの詩による 7 つのうた ; 混声合唱曲集』
全音楽譜出版社, 2009 請求記号 F25-616

伊藤康英作曲 『私と小鳥と鈴と ; 金子みすゞの詩による童謡集』
イトーミュージック, 2002 請求記号 F22-790

浦田健次郎 『星とたんぼぼ ; 金子みすゞの詩による同声または女声合唱組曲』
教育芸術社, c2003 請求記号 F23-200

鈴木憲夫作曲 『みすゞのそら ; 同声 (女声) のための合唱ファンタジー』
カワイ出版, 2004 請求記号 F23-858

寺嶋陸也作曲 『混声合唱とピアノのための空の色, 海の色』
カワイ出版, 2003 請求記号 F24-673

山田真治監修 『おかあさん ; 中田喜直選集』
犬山市 (愛知) : 山田真治, 2005 (東京, カワイ出版) (21 世紀に歌い継ぎたい名曲 ; 2) 請求記号 F25-827
中田喜直作曲「ほしとたんぼぼ」の自筆譜が掲載されている

新実徳英作曲 『金子みすゞの八つのうた ; 無伴奏混声合唱のための愛唱曲集』
音楽之友社, 2009 請求記号 F25-701

信長貴富作曲 『混声三部合唱とピアノのための青いフオークロア』
カワイ出版, 2010 請求記号 F25-942

三善晃作曲 『金子みすゞの詩による五つの詩曲』
カワイ出版, 2003 請求記号 F23-504

湯山昭 『向日葵の歌 ; 金子みすゞの詩による童声 (女声) 合唱のためのエッセイ』
カワイ出版, 1995 請求記号 F23-131

横山裕美子作曲 『みすゞとの旅 ; 2 部合唱とピアノのための』
音楽之友社, 2004 (New original chorus) 請求記号 F23-857

< 録音資料 >

向日葵の歌 : 金子みすゞの詩による童声合唱のためのエッセイ
小原孝(ピアノ) ; 深浦加奈子(朗読) ; 東京放送児童合唱団 ; 初山真紀子(指揮)
1994 年録音
[東京] : Columbia, 1995 請求記号 XD31025

みんなちがって、みんないい：金子みすゞの詩（うた）によせて
江川きぬ(メゾ・ソプラノ)；深沢亮子(ピアノ、第 1-9, 13-17 曲)；西山淑子(エレクトーン、第 10-12 曲)

1999 年録音

[Tokyo] : Art Union, p1999 請求記号 XD45944

金子みすゞの世界. 歌の旅

矢崎節夫監修；西村直記作曲；ポニージャックス, 大和田りつこ, 岡崎裕美, タンポポ児童合唱団, 渡辺かおり(以上、歌)；西村直記(ピアノ)；結アンサンブル

1999 年録音

Tokyo : King, 1999 請求記号 XD47269

金子みすゞの世界. 合唱の旅

矢崎節夫監修；西村直記作曲；凜の会, 杉並児童合唱団 (ザ・レディース)；山本実樹子(ピアノ), 津島麻子(ピアノ)；冬木透(指揮), 志水隆(指揮)

1999 年録音

Tokyo : King, 1999 請求記号 XD47270

金子みすゞの詩による歌曲集

向川原愼一作曲；田中良夫(テノール)；早瀬洋子(ピアノ)

2003 年録音

名古屋 : Voicelle, p2003 請求記号 XD55998

日々のおぼく：女声合唱作品集

Tokyo Ladies Consort Sayaka；松下耕(指揮)

2005 年録音

Gifu : Giovanni, 2006 請求記号 XD58271

啄木とみすゞを歌う

小川明子(アルト)；山田啓明(ピアノ)

2005 年録音

Tokyo : Live Notes, 2006 請求記号 XD58358

みすゞのうた：金子みすゞ meets 浜圭介

佐藤しのぶ(ソプラノ)；佐野成宏(テノール)；新日本フィルハーモニー交響楽団；佐渡裕(指揮)

2007 年録音

[Tokyo] : Avex Classics, 2007 請求記号 XD60010

金子みすゞ：日本の詩歌：永久愛蔵盤

中井實恵, 紺野美沙子, 小林綾子, 宮崎美子, 檀ふみ(以上、朗読)

Tokyo : King, 2005 請求記号 XD65406

金子みすゞ大全集：生誕 100 年記念：朗読 CD BOX

若村麻由美(朗読)

Tokyo : King, 2003 請求記号 XD67315-67324

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>

2012/1/10 編集 国立音楽大学附属図書館広報委員会：二塚恵里・撰正弘